

甲状腺機能低下症の犬に発生した乳腺癌の1例

えそら動物病院
神谷 善太

要約

難治性の潰瘍を主訴に柴犬が来院した。各種検査を行った結果、甲状腺機能低下症と脂質代謝異常が認められた。基礎疾患の治療を行った後、外科的に潰瘍病変を摘出した所、高悪性度の乳癌だった。今の所、再発、転移は認められず、基礎疾患も良好にコントロールできている。

キーワード：難治性潰瘍、リポテスト、甲状腺機能低下症、脂質代謝異常、乳癌、

症例

柴犬、12歳、避妊済雌、体重16.3kg、BCS 5/5、腹部に潰瘍があるとのことで来院。1年位前から他院にて定期的に包帯交換や洗浄を実施し、5回ほど縫合の処置をしたとのこと。初診時、腹部に3 cm×3 cmの潰瘍病変があり、不活発で、内股や指間に皮膚炎や色素沈着が認められた。基礎疾患、腫瘍性疾患を疑い各種検査を実施。

血液検査：ALP 6797 U/L T-Cho 409 mg/dL TG 270 mg/dL
TSH 0.07 (0.04~1.37) ng/ml T4 0.1未満 (0.5~2.8) µg/dl
FT4 0.3以下 (0.7~3.2) ng/dl
ACTH刺激試験 pre 0.6 (1.0~7.2) µg/dl post 4.5 µg/dl

リポテスト：複合逆転型

レントゲン検査：著変なし

エコー検査：胆泥(+)

病変部の細胞診 (FNA)：化膿性炎症

細菌培養：Staphylo. Intermedius GROUP

薬剤感受性試験：各種抗生剤に感受性有り

上記検査結果から甲状腺機能低下症及び脂質代謝異常と診断し、レボチロキシナトリウム0.02 mg/kg SID、プラバスタチンナトリウム1.0 mg/kg SID、クラブラン酸アモキシシリン15 mg/kg BID、療法食としてセレクトプロテイン (ダック&タピオカ)を開始し、引き続き患部の洗浄、包帯交換を実施した。治療開始から1ヵ月半後の検査でT4値は正常値、ALP 312 U/L、T-Cho 214 mg/dL、TG 84 mg/dLとなった。若干の病変部の縮小が認められたが、完治に至らなかった為、全身麻酔下で病変部の切除を行った。

病理組織学的評価：高悪性度乳腺単純癌を含む全層性潰瘍 マージン (-)

術後10ヵ月ほど経過しているが今の所、再発、転移は認められず、ALP、T-Cho、TGは正常範囲で良好に経過している。

考察

難治性の皮膚疾患 (今回は潰瘍病変)には、基礎疾患、特に代謝性疾患、腫瘍性疾患を考慮する必要がある。今回、潰瘍病変から腫瘍性疾患を疑いFNAを実施したが、腫瘍細胞は検出されなかった。搔爬による細胞診を実施していれば術前に乳癌の診断が可能であったかもしれない。

犬の甲状腺機能低下症のほとんど全てが原発性甲状腺機能低下症であり、二次性 (下垂体性) や三次性 (視床下部性) のものは少ない。本症例もTSH、T4、FT4の結果から原発性甲状腺機能低下症と診断した。原発性甲状腺機能低下症では、甲状腺にリンパ球、プラズマ細胞、マクロファージの瀰漫性浸潤と甲状腺濾胞の編成を伴うリンパ球性甲状腺炎もしくは、細胞間隙に線維組織あるいは脂肪組織の増生を伴う非炎症性特発性濾胞萎縮のいずれかが起こり、ホルモン分泌が低下することで症状が現れる。初診時、不活発な状態や色素沈着を伴う膿皮症、脱毛など、比較的典型的な症状が見られ、また、甲状腺機能低下症の約66%で認められる高コレステロールも検出された。

高脂血症、高ALPが認められた為、脂質代謝の解析を目的にリポテストを実施した。複合逆転型の結果は、クッシング症候群、糖尿病、甲状腺機能低下症、肝臓への脂質蓄積（二次的）などの疾患との関連を示唆するもので、今回は、甲状腺機能低下症とそれに伴い脂質代謝異常から肝臓への脂質蓄積が疑われた。高脂血症は人では、動脈硬化から心筋梗塞、脳梗塞の危険性があり、非常に重要な問題であるが犬では、それらの報告は少ない。しかし、今回のような波形を示す症例では肝臓内や全身の血管壁にLDLが蓄積していることが想定され、肝内流路の閉塞や血管のアテローム化が起こっていることが予想される。高いALPを伴う胆泥貯留（粘液嚢腫）との因果関係も示唆されている為治療が必要と思われた。

高脂血症の治療は低脂肪食の給与が前提である。今回は慢性の皮膚疾患のある症例の為、セレクトプロテイン（ダック&タピオカ）とした。投薬は甲状腺機能低下症の治療にレボチロキシン0.02mg/kg SIDと、胆嚢との関連を考慮し、LDLコレステロールの合成を抑えることを目的にプラバスタチンナトリウム1.0 mg/kg SID（夜）投与とした。胆泥があればウルソやエリスロマイシンの微量投与を検討するが、胆泥がわずかだった為、今回は使用しなかった。

高脂血症と乳癌との因果関係は不明であるが、今回の基礎疾患の治療が、血行改善による術部創傷治療機転への影響や血栓予防による転移抑制効果など術後の予後管理に非常に有効であったのではないかと考えられる。今の所、再発や転移は認められず、ALP、TG、T-Choも良好に維持できているが、今後も定期的なモニタリングを続けていく必要がある。また、プラバスタチンの減量も検討する必要がある。

参考文献

- 1) 松木直章：内分泌疾患ハンドブック 40-42
- 2) Gebhard,R.L.,Sievert,C.E.,Prigge,W.F.:
Diurnal Rhythm of HMGCoA Reductase Activity in Canine Intestine is Independent of Luminal Contents.Lipids,21:420-421,1986.
- 3) Manning PJ
Thyroid gland and arterial lesions of Beagles with familial hypothyroidism and hyperlipoproteinemia.
Am J Vet Res 1979 Jun;40(6):820-8